

# 横井小楠30代における「三代」理念の形成

北野雄士

## The Formulation of the Idea of “Three Dynasties” in Yokoi Shōnan’s Thirties

KITANO Yuji

### Abstract

Yokoi Shōnan (1809–1869) was a Confucian scholar and samurai active in the late Tokugawa Period. He idealized the politics of the three dynasties, the Hsia, the Yin and the Chou periods in ancient China as the standard of politics. This Confucian idea of “Three Dynasties (Sandai)” was formulated and emphasized in his mid-thirties.

I have attempted in this paper to examine the formulation process of this idea in his thirties. His idea of “Three Dynasties” meant the benevolent rule of the people by leaders under self-discipline in everyday life.

The background of his formulation of this idea was his sympathy for the people in their poverty, which was caused by the low price of rice since 1839 and the great damage done to the seaboard of Kumamoto by the typhoon of 1843.

Since his twenties, Shōnan had studied “A Japanese Collection of Principles (Shūgiwashō)” by Kumazawa Banzan (1619–1691), a famous Confucian samurai in the 17th century, and was probably influenced by Banzan’s idea of the benevolent rule by leaders under the self-discipline in daily life.

Shōnan cited the phrases concerning benevolent rule, or royal statesmanship from “The Book of Mencius” in his draft on “Policies of what ought to be done now (Jimusaku)”.

---

平成24年8月2日 原稿受理  
大阪産業大学 人間環境学部 教授

perhaps written in 1842.

His reading of “A Japanese Collection of Principles” and “The Book of Mencius” laid the foundation for his acceptance of the idea of “Three Dynasties”.

The turning point in his acceptance of this idea was his intensive reading of “Reflections on Things at Hand (Kinsiroku)”, edited in 1176 by Chu Hsi and Lu Zuqian, with his like-minded colleagues in 1843. This book contains the idea of “Three Dynasties”, and Shōnan probably obtained the idea from this book.

## はじめに

横井小楠は幕末の孟子とも言える人物である。孟子は紀元前4世紀末諸国を遍歴して、諸侯に王道政治（仁政）を説いてまわった。小楠も王道思想に基づいて肥後藩政の改革を提言した。その後越前藩主松平春嶽によって藩校の教授として招聘されると、越前藩士に、さらには春嶽や幕閣に対しても、民のための政治を求め、その方策を提案した。

小楠は儒学の徒として、王道政治が行われたとされる、夏、殷、周三代の聖人による政治を理想として、秦や漢の「功利」<sup>1)</sup>の政治を排した。このような理念を以下三代の理念と呼ぶことにする。三代の理念が批判する功利の政治とは、民のためではなく、国家のために富国強兵を図る政治のことである<sup>2)</sup>。

幕末の日本で王道政治を実現しようとした小楠は生涯三代の理念を保持した。しかし、その内容や模範とされる人物は、安政2年（1855）47歳の年に弟子と行った世界地理書『海国図志』（魏源編、原漢文）の講学、越前藩の経済政策への関与に伴って大きく変化している。

30代の三代理念は、私智を排することや、秦や漢の功利の政治を目指さないということが強調されるだけであった。三代の政治の具体的内容は、「時務策」を除いて十分に展開されなかった。これに対して、『海国図志』の講学以後は、古代中国の伝説的皇帝である堯、舜、禹が行った「民生日用の世話」<sup>3)</sup>の事業、人々の意見に耳を傾ける態度、天下の人材

1) 山崎正董篇『横井小楠 遺稿篇』（以下『遺稿篇』と略記）、明治書院、1938年、695-696、876頁。  
野口宗親『横井小楠漢詩文全釈』（以下『漢詩文全釈』と略記）熊本出版文化会館、2011年、148、454頁。

2) 小楠は、「功利」の政治の先駆者として、春秋時代に齊の国の宰相だった管仲を挙げて、「感懐十首」の中で「古今功利に帰せば、管仲罪は天に通ず」と詠んでいる。『遺稿篇』、876-87頁。  
『漢詩文全釈』、148-149頁。

3) 『遺稿篇』、38、903頁。

の講習討論<sup>4)</sup>などが重んじられるようになった。小楠は万延元年（1860）には、国際情勢や幕政も視野に入れた上で越前藩政の方針を提示した『国是三論』を口述した。

30代では、三代の理念とは言いながら、三代の聖賢はほとんど言及されなかった。むしろ江戸時代の日本で三代の理念を実践しようとした大名として、毛利齊広（第12代長州藩主）、上杉鷹山（第10代米沢藩主）が称賛された。中国では、三代以降の人物である諸葛武侯（諸葛亮、字は孔明）が模範とすべき俊傑として挙げられた。これに対し、『海国図志』の講学以後になって、ようやく堯、舜、禹の具体的な行動が小楠の解釈を施されて言及されるようになった。

本稿はこのような変化が起きる前の時期、つまり30代に小楠が形成した三代の理念を対象とし、この時期に書かれた漢詩文、書簡、政策論などに基づいて、三代理念の形成過程を描き、その特質を明らかにしようとするものである。以下、30代の三代理念を前期の三代理念と呼び、40代後半以降のそれを後期の三代理念と呼ぶことにする。

本論に入る前に、簡単に小楠の前期の三代理念に関する研究史を概観し、本稿の視点を明らかにしておこう。

小楠の三代理念に関する研究業績を見ると、その多くは、後期の三代思想を対象としている。前期の三代理念が言及されるようになったのは1970年代の前半からである。

まず、平石直昭は1972年の研究ノート<sup>5)</sup>において、小楠が30代に書いた漢詩文や雑録を分析し、次の2点に着目した。すなわち、①小楠が30歳のときには同時代の名君として、水戸の徳川斉昭、肥前の鍋島直正を、過去の名君としては、肥後の細川重賢、米沢の上杉治憲（号は鷹山）を挙げているのに対して、35歳になった天保14年（1843）には、日本の諸侯の中では上杉鷹山のみが、三代の政治を目指して己を修め徳治を行ったと誉めていること、②第8代肥後藩主である細川重賢に対する小楠の評価が賛美から非難へと180度転換したことである。平石は、功利の政治を排し三代の政治を理想とする、このような人物評価の転換と、徂徠学的な傾向から朱子学への思想的転換との並行関係を指摘した。

次に、松浦玲は1973年の論文<sup>6)</sup>の中で、日本を理想的な儒教国家にしようとした政治家

4) 同書、232頁。

5) 平石直昭「横井小楠研究ノート——思想形成に関する事実分析を中心に——」『社会科学研究』東京大学社会科学研究所紀要 第24巻、第5・6合併号、1973年、204-206頁。平石は、1974年に発表した次の論文では、朱子学と小楠の思想とを比較しつつ後期の三代思想の特質を考察している。平石直昭「主体・天理・天帝（二）——横井小楠の政治思想——」『社会科学研究』東京大学社会科学研究所紀要 第25巻、第6号、1974年、64-65、67-68、84、95、114、133-134頁。

6) 松浦玲「文明の衝突と儒者の立場——日本における儒教的理想主義の終焉（三）」『思想』592号、1973年10月、60-63頁。

として小楠を捉え、そのような視点に立って1976年小楠の評伝を刊行した。この評伝は、幕末の流動的な政治過程の中に小楠の政治的実践を位置づけたものであり、小楠の前期の三代理念にも注意を払っている。すなわち、小楠が天保14(1843)年に、三代の基準にかなう大名として毛利斉広、上杉鷹山を挙げていることを指摘している<sup>7)</sup>。

前期の三代理念はこのように平石や松浦によって言及されるだけであった。しかし、2000年代になって野口宗親によって小楠の漢詩や漢文が解説され、その成立年代、典故、背景の多くが解明された<sup>8)</sup>。野口は「題見聞私記後」と「読諸葛武侯伝」の二つの漢文や、漢詩「感懐十首」などの読解を通じて、小楠の三代理念が30代に形成されたことを明らかにした<sup>9)</sup>。前期の三代理念の研究は後期のそれに比べて立ち遅れていたが、こうして前期の三代理念の形成過程をたどることが容易になった。

本稿の課題は、以上のような研究史を踏まえ、30代の小楠がどのようにして三代の理念を唱えるようになったのかを考察することである。

本稿の特色は、30代における小楠の思想の全体的な動きの中で、前期の三代理念の形成過程を詳述していることにある。その際下記の3点に特に注意を払った。第一に、『集義和書』(熊沢蕃山)、『孟子』、『近思録』の影響、第二に、上杉鷹山のみならず、毛利斉広、諸葛武侯に関する記述、第三に、実学党の同志であった、元田永孚や荻昌国の同じ時期の文章や漢詩などである。

小楠の三代理念の展開過程の全体を十全に捉えるには、三代理念の前期から後期への展開とその背景、後期の三代理念の特質とその到達点を究明する必要がある。この問題は稿を改めて論じたい。

全体の構成は以下の通りである。第1章では、20代から江戸遊学(31-32歳)時まで小楠が書いた詩文や雑録に基づき、当時小楠が何に関心を持ち、何を考えていたか、さらに熊沢蕃山からどのような影響を受けた可能性があるかを論じる。第2章では、主として、小楠が30代半ばに起草した「時務策」に基づいて、その論策が目指したもの、小楠に対する孟子の影響を考える。第3章では、まず「読見聞私記後」(天保14年(1843)執筆)における毛利斉広論と上杉鷹山論を取り上げ、そこで提唱されている三代理念の内容を詳しく検討する。次に「読諸葛武侯伝」の中で、三代以降の人物の中で見習うべき俊傑とされて

7) 松浦玲『横井小楠 儒教的正義とは何か <増補版>』朝日新聞社(朝日選書)、2000年、42-43頁。松浦は、小楠が嘉永4(1851)年、上国遊歴の途中岡山で池田光政を「三代以上」と称賛したことも指摘している。同書、76頁。

8) 『漢詩文全釈』。

9) 同書、152、437、455-457頁。野口宗親「横井小楠の「感懐」詩について」、『熊本大学教育学部紀要』第55号、人文科学、2006年、217頁。

いる諸葛武侯論を紹介する。さらに天保14年に実学党の仲間と講学を始めた『近思録』から小楠がどのような影響を受けたのかを考察する。第4章では、弘化2年(1845)に小楠が朱子学を専一に学ぶ境地と自らの朱子学理解を詠んだ「感懐十首」、及び嘉永2年(1849)に越前藩士三寺三作に手渡した詩文集や書簡(『機密録』)に基づいて、小楠が30代後半を経て41歳になるまでの時期にどのような思想に到達したかを明らかにする。最後に以上の論述をまとめて結論としたい。

## 第1章 江戸遊学までの小楠

30代の三代理念を考察する上で重要なテキストを並べると、①居寮長時代の研究ノート『戊戌雑志』、②江戸遊学時の見聞記『遊学雑志』、③肥後藩政の改革を論じた「時務策」、④漢文、特に「題見聞私記後」、「読諸葛武侯伝」、漢詩集の『東游小稿』及び『小楠堂詩草』、特に後者に含まれている「感懐二首」、「感懐十首」、⑤書簡、特に久留米藩儒の本庄一郎宛書簡である。

本章では、小楠が20代から江戸遊学時(31-32歳)までに書いた詩文や雑録に基づいて、この時期にどのような思想や関心をもっていたかを略述する。その時期に書かれたものとしては、かなりの数の漢文、『戊戌雑志』、『遊学雑志』、『東游小稿』などがある。

江戸遊学に出発する前の時期、小楠の念頭にあった主なものは、①儒学を学ぶ者はいかにあるべきか、②為政者はいかにあるべきか、③臣下はいかにあるべきかという問題であった。後述するように、このうち前2者の問いは『戊戌雑志』によく読みとれる。

まず、遊学前の関心を、『戊戌雑志』やその時期の漢詩によって、次に遊学中の関心を『遊学雑志』や漢詩によって探してみたい。

『戊戌雑志』(天保9年(1838)執筆)は小楠が時習館の居寮長(最上級クラスの長)だったときの雑録である。そこには、中国、日本の歴史書、思想書、詩論書などの抜粋や要約、小楠の感想、さらに古今東西の人物の逸話などが書かれている。

当時小楠は、特に和漢の歴史を好み、古今の治乱興廃を洞察し、高い識見に達するには史学が重要と考えていた<sup>10)</sup>。従って『戊戌雑志』にも、20代に書かれた漢文にも和漢の歴史に関するものが多い。史書の中で描かれた古今東西の人物の行動を素材にして、為政者や臣下がどうあるべきかを思索していたのである。

---

10) 元田永孚「還暦之記」(元田竹彦・海後宗臣篇『元田永孚文書』第1巻,元田永孚文書研究会,1969年所収),21頁。

儒学を学ぶ心構えに対する関心は、『戊戌雑誌』の中の、特に宋、元、明、清などの時代の思想書や歴史書の抜粋、要約、感想のところによく表れている。例えば小楠は、学問を始める際には何よりも「立志」<sup>11)</sup>が重要だと考えていた。小楠が『戊戌雑誌』の中で引用している、王塘南おうとうなん（王時槐、明の進士）の言葉には「天地の為に志を立て、生民の為に命を立て、往聖の為に絶学を継ぎ、万世の為に太平を開く」<sup>12)</sup>という張載（張横渠、北宋の儒者）の格言が含まれている。

為政者のありかたに関するものとしては、例えば張南軒ちやうしやく（張栻、南宋の儒者）の文章から抄録された、利ではなく義を重んじるべきだという一節<sup>13)</sup>がある。小楠は、利を排し義に従うという考え方に共感したのだろう。この考え方はその後も維持されている。

その他にも「至誠」<sup>14)</sup>によって人に対すべきことを説いた文章が引用されたり、思慮と決断力を併せ持つ人物は希少だという文章<sup>15)</sup>が書かれたりしている。

次に、『遊学雑誌』（天保10年（1839）5月～天保11年（1840）1月頃 執筆）や遊学中に詠まれた漢詩に基づいて、小楠が遊学中何に関心をもっていたかを考えてみたい。

『遊学雑誌』<sup>16)</sup>は遊学中に見聞したことを記したメモである。江戸での見聞を熊本への友人に知らせるために書かれたものと思われる。その内容は、江戸で面会した人物の言行やその人物に関する小楠の評価、将軍の動静、幕府の歴史や制度、旗本の気風、様々な藩の動向、ケンペルの「鎖国論」（志筑忠雄訳）の読書ノートなど、雑多な内容を含む。遊学中日本の内外に関する情報に大きな関心を寄せていたことが分かる。

小楠が江戸で会った人物の中で特に誉めているのは、水戸藩士の藤田東湖、幕臣の川路聖謨である。東湖と出会ったときの記録は重要であるので触れておきたい。

『遊学雑誌』<sup>17)</sup>によれば、小楠は天保10年5月（31歳）江戸で水戸藩の藤田東湖に面会し、東湖が朱子学流の究理を嫌い、事実を重んじて肥後藩の農政に関心を示すところに共感した。そのとき小楠は東湖との議論を、「熱せずして水よりも冷やか」<sup>18)</sup>であり、まるで熊沢蕃山（1619-1691）の『集義和書』、『集義外書』を読むようだと漢詩に詠んでいる。小楠が

11) 『遺稿篇』, 780頁。『漢詩文全釈』, 310-313頁。

12) 『遺稿篇』, 780頁。『漢詩文全釈』, 312頁。張載のこの言葉は、『近思録』にも収録されている。

但し、表現が若干異なっている。市川安司『近思録』（新釈漢文大系37, 明治書院, 1995年, 以下市川訳注『近思録』と略記), 147-148頁。

13) 『遺稿篇』, 780-781頁。『漢詩文全釈』, 313-315頁。

14) 『遺稿篇』, 784頁。『漢詩文全釈』, 327-328頁。

15) 『遺稿篇』, 787頁。『漢詩文全釈』, 341-342頁。

16) 『遺稿篇』, 798-822頁。

17) 『遺稿篇』, 799頁。

18) 『遺稿篇』, 863頁。『漢詩文全釈』, 64-65頁。

当時朱子学の抽象的な議論よりも現実に関心を寄せていたこと、その点で東湖に共感したことが分かる。

また、漢詩の内容から判断すると、小楠は東湖に会う前から、つまり熊本にいる時から、蕃山の『集義和書』、『集義外書』に親しんでいた。蕃山は周知のように17世紀半ばに岡山藩主池田光政に登用されて、王道思想に基づき治山治水や飢饉対策などに関わった儒者である。

小楠はその後『集義外書』は偽書ではないかと疑い<sup>19)</sup>、『集義和書』だけを尊重し、晩年に至るまで弟子や他藩の武士との講学のテキストに使っている。『集義外書』に見られる、仏教や日本の風習に妥協的な態度が気に入らなかった可能性がある。

『集義和書』は、儒教の精神に基づき、日本の為政者である武士に対して、①一人を慎み(慎独)、意を誠にして生きるべきこと<sup>20)</sup>(心法)、②堯舜の治<sup>のつと</sup>に法り、民のための政治を行うべきこと<sup>21)</sup>(王道思想とその実践論)、③時、場所、社会的地位(位)に応じて行動すべきこと<sup>22)</sup>(時所位論)などを問答体で分かりやすく説いている。

②について補足すると、蕃山は、『集義和書』の中で「法るべきは堯舜の治也」と述べ、「堯舜三代の法」でそのときに行うべきものを取るべきだと考えていた。また、秦漢以降は「道統の伝」を失って、道徳の水準が甚だしく低下していたと述べている。

王道思想は「堯舜の治」の大原則である。蕃山は王道思想に基づいて、『集義和書』巻第16で「国の本は民也。民の本は食也。民・食の事くはしくしらは、国・郡を治る事あたはず。」<sup>23)</sup>と述べ、為政者が民衆の生活の実際に精通することを求めている。『集義和書』の熟読は、小楠が後に三代理念を形成する際の素地になったと考えられる<sup>24)</sup>。

---

19) 『遺稿篇』、176頁。

20) 熊沢蕃山『集義和書』（『日本思想大系 30 熊澤蕃山』、岩波書店、1971年所収）、71、79、101、107、158、163-164、182、198、202、207、213-214、309頁。

21) 同書、21、33、113、228-229、280、320、331、344頁。蕃山が「堯舜三代の法」に触れた箇所は、同書、35頁、280頁。

22) 同書、51、76-77、93-94、97、118、226、245、254、268、380頁。

23) 同書、344頁。「国の本は民也。」という言葉は、『書経』の「民は惟れ邦の本なり」<sup>20)</sup>という言葉に由来する。小野沢精一『書経下』、明治書院（新釈漢文大系）、1993年、382-383頁。

24) 蕃山が小楠に与えた影響を指摘した文献には下記のものがある。前掲平石直昭「主体・天理・天帝（二）——横井小楠の政治思想——」、69、80-81頁。八木清次「幕末思想家と熊沢蕃山—幽谷・方谷・小楠の蕃山理解・受容をめぐる—」『日本思想史学』第17号、1985年、46-48頁。源了圓『初期実学思想の研究』、創文社、1989年、482-483、511頁。源了圓「横井小楠の「三代の学」における基本的概念の検討」『国際基督教大学学報Ⅲ—A アジア文化研究別冊 伝統と近代化』、1990年、57頁。拙稿「横井小楠による水戸学批判と蕃山講読—誠意の工夫論を巡って—」『横井小楠研究年報』第2号、2004年、1-20頁。『漢詩文全釈』、64-65、125頁。

遊学中に読んだ本の中で、特に小楠の印象に残ったのは、ケンペルの「鎖国論」の翻訳(志筑忠雄訳)であった。小楠は『遊学雑誌』にその梗概を記し、その感想として漢文で『読鎖国論』<sup>25)</sup>(初稿)を書いている。それによれば、ケンペルは、日本は四方を海に囲まれ天険があって鎖国がしやすいと述べているが、為政者が「徳を修め」なければ国内でいかなる禍乱が起きるか分からないのであり、天険に頼らず徳を修めることこそが「万世の安を保つ道」である。

小楠は「鎖国論」を読んだり、海外情報に詳しい江戸在住の知識人と交流したりすること<sup>26)</sup>によって、日本が鎖国した事情を理解し、ロシアを始めとして諸外国に関心をもつとともに、日本一国の統治のあり方も考えるようになった。

江戸滞在中に詠まれた漢詩の多くは『東游小稿』に収められている。そのうち「臘月念五日藤田子登招飲…」(「臘月念五日、藤田子登招飲す。」)は主君に対する人臣の忠誠心のあり方を問うている(臘月念五は12月25日、子登は、藤田東湖の字)。小楠は、この詩の中で悲憤慷慨して君主をとがめる水戸藩士を批難して、「徐ろに君の心を拏つは是れ臣の職」<sup>27)</sup>と詠み、臣下はじっくりと君主の心をうつように努めなければならないと説いている。また、漢詩「読北畠公正統記」<sup>28)</sup>は『神皇正統記』を読んで、北畠親房の勤王の志、忠愛の念に感銘したというものである。

以上のように、江戸遊学時までの詩文や雑録を読むと、小楠が、儒教を学ぶ者の心構え、為政者や人臣の理想像を絶えず考え、日本を取り巻く内外の情勢に強い関心をもっていたことが分かる。小楠のこうした関心は生涯続いている。中国や日本の史書、蕃山の著書、ケンペルの『鎖国論』、江戸での交際などが、そのための絶好の材料になっていた。

## 第2章 「時務策」における藩政改革論と王道思想

小楠は江戸遊学中の天保10年(1839)12月25日、水戸藩士藤田東湖に招かれた宴会の帰途、

25) 野口宗親「横井小楠の初期対外観—『遊学雑誌』を中心に(その1)」『熊本近研会報』第483号、2012年3月、7-8頁。『遺稿篇』、692-693頁。『漢詩文全釈』、445-450頁。

26) 野口宗親「横井小楠の初期対外観—『遊学雑誌』を中心に(その2)」『熊本近研会報』第484号、2012年4月。

27) 『遺稿篇』、864頁。『漢詩文全釈』、69頁。

28) 『遺稿篇』、862-863頁。『漢詩文全釈』、59-60頁。

酔っ払って藩外の者と喧嘩になった<sup>29)</sup>。これが江戸の肥後藩邸の役人の耳に入り、藩役人は、小楠の過酒やこの喧嘩沙汰、さらに他藩士との頻繁な交際を問題にした。結局小楠は帰国願いを出さざるを得なくなった。

天保11年（1840）32歳の年の2月、小楠は帰国の命を受けて江戸を後にし、4月に熊本へ帰った。同年12月に逼塞70日の処分を受けた<sup>30)</sup>。

小楠は儒学を学び直しながら、肥後藩政の歴史を調べ、藩政の現状を検討して、天保13年に<sup>31)</sup>藩政の改革論を執筆した。これは後に徳富蘇峰によって「時務策」と題された。

「時務策」は、「節儉の政を行ふべき事」、「貨殖の政を止むる事」、「御家中の風俗を正す事」、「町方制度を付る事」の4篇からなる<sup>32)</sup>。

本章では、最初に各篇の結論を紹介し、その上で「時務策」の中で使われた孟子の言葉に着目して「時務策」と王道主義との関係を考察したい。

まず、「節儉の政を行ふべき事」<sup>33)</sup>は、米価が下落し物価が上昇して「士民」が窮乏する中で、「官府」のために武士の手取米を減らしたり町や村に臨時課税（「寸志銀」）をしたりするのではなく、士民の生活が立ちゆくように士民の奢った生活を抑える節儉政策を実施することを主張している。

次に、「貨殖の政を止むる事」<sup>34)</sup>は、藩当局が民衆に金を貸し付けて利子を取る「貨殖の政」を早く止めることを訴えている。貨殖の政の弊害としては、多くの藩士が利息支払のために収入がなくなり（「無手取に成り」）、町人や農民の中には利息の取り立てのために家蔵を差し押さえられたり、田地を取り上げられたりして生活できなくなった者が出てきたことが挙げられている。

さらに、小楠は、宝暦の改革時に藩主の細川重賢に仕えた堀平太左衛門が藩の財政を立

---

29) 山崎正薫篇『横井小楠 伝記篇』（以下『伝記篇』と略記）明治書院、1938年、67-69頁。

30) 同書、84頁。

31) 「時務策」の成立時期については、天保12・13・14年説がある。これについては下記の3文献を参照した。鎌田浩『熊本藩の法と政治—近代的統治への胎動』創文社、1998年、161-162頁。堤克彦「肥後藩士横井平四郎の『時務策』著述の時期について—『天保13年秋説』提唱の背景—」、『熊本県高等学校地歴・公民科研究会 研究紀要』第34号、2004年。前掲野口宗親「横井小楠の「感懐」詩について」、217頁。筆者は原稿が完成したのは天保13年と考える。

32) 遺稿篇で割愛された「御家中の風俗を正す事」及び「時務策」の原稿群の状況は次の論文で紹介されている。徳永洋「横井小楠『時務策』考」（『近代の黎明と展開—熊本を中心に』、熊本近代史研究会、2000年所収）、24-32頁。同著者「横井小楠『時務策』再考」『横井小楠研究年報』第2号、2004年、51-64頁。

33) 『遺稿篇』、68-69頁。

34) 『遺稿篇』、71頁。

て直す便法として貨殖の政を始めたことを批判し、「国を憂ひ民を憐むの心起るときは第一に貨殖の筋を止めざれば一日片時も安らかなる心無き事なり」<sup>35)</sup>とその廃止を力説している。

「御家中の風俗を正す事」<sup>36)</sup>では、江戸での見聞に基づき、士風の立派な藩として米沢藩、会津藩、水戸藩を取り上げ、その原因としていずれも立派な初代藩主や中興の藩主に恵まれて気概のある士風が生まれ、それが遺風となっていることを指摘している。良き士風を残した藩主として挙げられているのは、米沢藩の上杉鷹山、会津藩の保科正之、水戸藩の徳川光圀である。

最後に「町方制度を付る事」では、町政全体を統括する権限をもつ町奉行において市中の商人を強力に統制すること<sup>37)</sup>、農村から熊本市中に流入した人口の一部を帰村によって削減すること<sup>38)</sup>などが提案されている。

以上のように、「時務策」は、民衆の生活を立ち行かせるという観点から、藩による聚斂の政を止めるとともに、奢美の抑制、都市人口の抑制、商人の統制によって物価を下げることを提言している。

「時務策」には孟子の言葉が使われたり、孟子の思想にそった議論が展開されたりしている。その個所を見ながら、「時務策」と孟子の思想との関係を考えてみよう。

まず、「節儉の政を行ふべき事」には、「…今日の勢孟子の所謂盍返其本と云処にて、節儉の本に立返らざれば御法度筋凡て徒法に落ち一事一令も行れず、唯に無益成る迄にて無く却て大に弊害を生ずるなり。扱其節儉の本と云は聊も官府に利する心を捨て一国の奢美を抑え士民共に立ち行く道を付くるを云事なり。」<sup>39)</sup>という一節がある。

ここで「盍返其本」(「なんぞその本に返らざる」)は、『孟子』梁恵王章句上の中で、孟子が齊の宣王(姓は田、名は辟疆)に対して、その苛政を批判し、民衆の暮らしを立ち行かせる王道政治の根本に返るように迫る場面で2箇所<sup>40)</sup>出てくる。小楠は、『孟子』のこの場面を念頭に置きつつ肥後藩の政治を批判したのである。

次に、小楠は藩が町人や農民に「寸借銀」を賦課することを批判しているが、租税を軽くすることは孟子の主張でもあった。孟子は梁の恵王に対して「仁政を民に施し、刑罰を

35) 『遺稿篇』, 70頁。

36) 前掲徳永洋「横井小楠『時務策』考」, 29-30頁。

37) 『遺稿篇』, 75頁。

38) 『遺稿篇』, 77頁。

39) 『遺稿篇』, 69頁。

40) 小林勝人訳注『孟子(上)』, 岩波書店(岩波文庫), 2009年, 59-60, 63-66頁。

省き、税斂を薄くし…」<sup>41)</sup>というように仁政を施せば天下の王者になれると述べている。

さらに、『孟子』滕文公章句上篇では、孟子は国を治める道を問うた滕の文公に対して、税制の改革を主張し、「称貸」<sup>42)</sup>すなわち国家による高利をとる貸し付けを批難している。「時務策」の主張が孟子のそれと一致していることが分かる<sup>43)</sup>。

「時務策」が書かれた背景には、天保10年以来米価が急落して、肥後藩の民衆の困窮した生活が小楠の視野に入ってきたという事情がある。

米価急落に追い打ちをかけたのが、天保14年（1843）9月3日に熊本を襲った台風・高潮である。小楠は、この台風の後「感懐二首」<sup>44)</sup>と題された漢詩を詠んでいる。その第二首は、台風によって村々が田畑や家屋に甚大な被害を受けたことを描写し、「無罪年」<sup>45)</sup>（「年に罪する無かれ」）という孟子の言葉を使って、藩に対し、年の巡り合わせのせいにならないで民を救済してほしいと訴えている。

小楠だけでなく荻昌国や元田永孚も当時、孟子の思想に共感を寄せていた。

元田の『還暦之記』<sup>46)</sup>によれば、元田は天保12年（1841）荻と一緒に『孟子』を読み、特に「何ぞ必ずしも利を曰はん。ただ仁義あるのみ。」「人皆人に忍びざるの心あり。人に忍びざるの心を以て人に忍びざるの政を行なわば、天下<sup>たなごころ</sup>掌<sup>めく</sup>に運らすべし。」「生を養ひ死を喪<sup>おく</sup>りて憾<sup>うらみ</sup>なからしむるは王道<sup>はじめ</sup>の始なり。」という孟子の言葉に感銘を受けている。

荻は同じころ『集義和書』、『宋名臣言行録』、『孟子』を摘要して元田に見せている。

小楠は、江戸遊学から帰国したのち、「時務策」を起草して藩の税制や貨殖政策を批判し、藩に対して民衆の暮らしを第一に考えた王道政治を行うように求めた。お題目ではなく、幕末の肥後藩の民衆が置かれた具体的状況に則して、孟子が唱えた王道思想の実現を目指していたのである。

---

41) 同書、46-47頁。

42) 同書、193-194頁。

43) 『孟子』が小楠に与えた影響については次の2文献がある。前掲野口宗親「横井小楠「感懐」詩について」、226-225頁。拙稿「人に忍びざるの政」を目指して——横井小楠の政策論と『孟子』引用』『大阪産業大学人間環境学論集』9号、2010年、23-40頁。

44) 『遺稿篇』、874頁。『漢詩文全釈』、123-125頁。「感懐二首」の成立年代は、野口宗親の「横井小楠「感懐」詩について」、226頁において明らかにされた。野口は、天保14年（1843）9月3日に台風・高潮が熊本を襲い、田畑や家屋に莫大な被害をもたらしたという史実に基づいて、漢詩が詠まれた時期を同年の秋と推定している。

45) 「無罪年」（「年に罪する無かれ」、『孟子』原文では「無罪歳」）は『孟子』梁惠王章句上篇に出てくる。前掲小林勝人訳注『孟子（上）』、40-43頁。前掲野口宗親「横井小楠「感懐」詩について」、226頁参照。

46) 前掲元田永孚『還暦之記』、26頁。元田が引用した孟子の言葉は必ずしも原文通りではない。

### 第3章 三代理念の成立

30代の小楠が初めて明確に三代の理念を表明した漢文として、天保14年(1843)11月に書かれた「題見聞私記後」<sup>47)</sup>がある。そこでは、三代理念を実践しようとした大名として、毛利斉広<sup>48)</sup>、上杉鷹山が挙げられている。また、「読諸葛武侯伝」(漢文)では、三国時代の諸葛武侯(諸葛亮、字は孔明)が三代以後の人物で最も見習うべき俊傑であると述べられている。本章では、この三人の人物像と三代理念との関係、天保14年に始まった『近思録』の講学が小楠に与えた影響を考えながら、小楠が30代半ばに提唱した三代理念の内容を明らかにしたい。

#### 第1節 「題見聞私記後」における毛利斉広論と上杉鷹山論

本節では、「題見聞私記後」における、毛利斉広、上杉鷹山に関する小楠の言説を取り上げる。

天保14(1843)年2月小楠の友人萩昌国は長門国を訪れた<sup>49)</sup>。萩は現地で第12代長州藩主毛利斉広の言行録『見聞私記』を入手して熊本へ持ち帰った。横井小楠(当時35歳)はこの言行録を読んで深い感銘を受け、同年11月「題見聞私記後」という題の文章を書いた。

この文章の中で初めて、三代という言葉が政治理念を表明する文脈の中で使われている。また、この文章は、小楠が三代理念を唱えたテキストの中で最も古いものでもある。

『見聞私記』は、斉広の侍講であり、朱子学者の山縣半七(太華)が斉広の生涯と言行を書きとめたものである。毛利斉広は文化11年(1814)、第10代長州藩主毛利斉熙なりひろの次男として萩に生まれた。8歳の時、子どものいなかった第11代長州藩主毛利斉元の養子になり、天保7年(1836)第12代長州藩主となった。しかし、就封後1カ月にならないうちに20歳の若さで急逝した。

斉広は6歳の時から山縣半七について儒教を学び、半七に熱心に質問するとともに、儒教の教えを日常生活においても藩政においても実践しようとした。日常生活においては粗衣粗食を心がけ、仁愛の精神で配下の者をいたわり、藩政においては世子の身分にもかかわらず民衆の立場に立って長州藩の苛政を批判した。

『見聞私記』には、斉広が三代以上の聖人を目指していたこと、学問の目的は己の名利

47) 『遺稿篇』, 695-696頁。『漢詩文全釈』, 453-457頁。

48) 毛利斉広に関する伝記的記述は、『毛利十一代史』に収められている「見聞私記」及び「崇文公記」に拠る。山縣半七篇『斉広公遺事 別名見聞私記』(ともに大田報助篇『毛利十一代史』第42冊所収)、明治43(1910)年。

49) 『遺稿篇』, 695頁。『漢詩文全釈』, 454頁。

ではなく己の修養であるという「為己之学」の考え方をもっていたこと、節儉を自らに課していたこと、農業振興による富国を目指していたことなどが書かれている<sup>50)</sup>。

このように『見聞私記』は、多くのエピソードを交えながら山縣半七が見聞きした毛利齊広の姿を描いたものである。小楠が『見聞私記』の感想を書いたのは齊広が早世してから7年後にあたる。小楠はなぜ齊広の言行に感銘を受けたのだろうか。

小楠は「題見聞私記後」の中で、齊広がまず家庭での風儀から始めて、その上で民を治めようとしたこと、短い生涯にもかかわらず領民に慕われたことを強調する。さらに齊広について「立志の大、識見の明は直ちに三代を期して、秦・漢よ自り以下は屑いざよしとせざる所なり<sup>51)</sup>」と述べ、齊広が夏、殷、周三代の政治を目標としたことを高く評価している。

小楠によれば、治者が目指すべき政治は、功利をこととする秦や漢の政治ではなく、三代の政治でなければならない。その内容はまず心底から学に志し、家庭生活での修養から始めて、ついには人を治めるに至るという『大学』の「修己治人」の教えである。

毛利齊広はまさにこの教えをひたむきに実践しようとした藩主であったとして、小楠はその早世を惜しんだ。「為己之学」の思想や節儉は、当時小楠が重んじていたものであった<sup>52)</sup>。

このようにして毛利齊広は、小楠によって、三代の治を目指し修己治人の実践を心がけた大名として描かれた。三代の理念が『大学』の修己治人の枠組みで捉えられていることが注目される。

「読見聞私記後」が書かれた天保14年（1843）はまた、前述の実学党のメンバーによって朱子・呂祖謙編『近思録』の講学<sup>53)</sup>が始められた年でもあった。夏、殷、周三代の政治を理想とし、当時の日本においてその理想を実践しようとする考え方は、小楠が長岡監物、下津休也、荻昌国、元田永孚らと会合を重ねて朱子学の書物を講学する中で確立した思想である。小楠は仲間とともに、経典の詞章の細かな解釈にとらわれず、家庭生活での修養から始めて、「治人」に至る「修己治人」の学を目指した。

元田永孚も天保14年（1843）10月中旬に同じ「見聞私記」を読んでその感想文「書見聞私記後」<sup>54)</sup>を執筆し、毛利齊広が三代の聖人を志し、熱心に聖賢の学を修めようとしたこ

50) 前掲『毛利十一代史』第42冊、34葉。

51) 『遺稿篇』、695頁。『漢詩文全釈』、454頁。

52) 小楠は30代の半ば以降、学問へ向かう姿勢として「為己之学」を重視していた。『遺稿篇』、127、933、940、943頁。節儉策は、天保13年ごろの起草と推定される「時務策」で提言されている。同書、69-70頁。

53) 前掲元田永孚『還暦之記』、24、27頁。

54) 元田永孚「書見聞私記後」（元田永孚『小楠先生批評 東野詩稿』所収、国立国会図書館蔵）参照。

とを称賛している。三代という言葉を使い、斉広が三代の聖人を志したことを評価する点で、小楠と永孚は軌を一にしている。但し、小楠は、斉広が三代の治を実践しようとしたことを高く評価しているのに対して、永孚は斉広が熱心に儒学を修めようとしたことを誉めている。

元田の原稿には荻昌国の書き入れがあり、小楠も読んで添削、書き入れをしている。野口は、「見聞私記」の感想は実学党のメンバーが互いに切磋琢磨するための課題作文のテーマであったと推定している<sup>55)</sup>。

元田永孚は天保12年(1841)から天保14年の間、および弘化4年(1847)に作った漢詩文を「小楠先生批評 東野詩稿」という題で編年的にまとめている。これを見ると、元田によって「三代」という言葉が初めて用いられるようになるのは天保14年からであることが分かる<sup>56)</sup>。

さて、小楠の「題見聞私記後」によれば、三代の治を目指した為政者は、同時代の諸侯では毛利斉広以外には見つからない。世間で有名な名君は、「私智」<sup>57)</sup>にまかせ功利に走る政治を行っており、治めれば治めるほど民は疲弊していく。過去においては一人米沢藩の上杉鷹山だけが聖人の道を信じ、まず夫婦の関係からその道を実践し、その上で民を治めた。

小楠は、このように斉広と同じく三代の思想を実践しようとして成果を挙げた大名として上杉鷹山に言及している。鷹山に関する言説を見てみよう。

小楠はまず、天下に名公と言われる人がいないわけではないが、みな私智にまかせ功名を求めており、徳礼による治世になっていないと批判する。その上で、天下300藩の大名の中で「聖人の道を信じ、躬行の徳に本づき、以て其の民人を治めし者は唯だ米沢の鷹山公有るのみ。」<sup>58)</sup>と高く鷹山を称え、その理由を「鷹山公の治を為すや、身自らして家へ、家よりして国へ、夫婦より造端して、徳礼は一藩に行わる。公已に世を没すと雖も、成徳の事業の深く民心を染むること、愈久しくして忘る能わざるなり。」と述べている。

小楠は、鷹山が毛利斉広と同じく『大学』の「修身齐家治国平天下」の思想を実践し、その徳治が今なお民心に浸透していることを称賛している。毛利斉広の伝を読んで上杉鷹山を思い起こしたのであろう。

55) 『漢詩文全釈』, 457頁。

56) 前掲元田永孚『小楠先生批評 東野詩稿』。永孚が天保14年から三代という言葉を用いるようになったことは野口宗親氏のご教示による。

57) 『遺稿篇』, 695頁。『漢詩文全釈』, 454頁。

58) 『遺稿篇』, 695-696頁。『漢詩文全釈』, 454頁。

元田永孚も「書見聞私記後」の中で、上杉鷹山について「成徳深仁」<sup>59)</sup>で「千載の一君」と誉めている。鷹山は元田によっても理想の君主としてみなされていた。

## 第2節 「読諸葛武侯伝」における諸葛武侯論

「三代」という言葉は「題見聞私記後」の他に、「読諸葛武侯伝」（漢文）でも用いられている。「読諸葛武侯伝」は、小楠が『三国志』蜀書の諸葛亮（諸葛武侯）伝を読んだ感想である。この文章がいつ書かれたかは不明だが、嘉永2年（1849）に来塾した越前藩士の三寺三作が旅立つときに小楠が託した5点の詩文<sup>60)</sup>の一つであることから、少なくとも嘉永2年までに書かれたことが分かる。また、同学の士と朱子学を日々講習していることを窺わせる内容から、実学党のメンバーと講学を開始した天保14年（1843）以降に書かれたものと推定される。年代が確定できないが、30代後半から41歳までに書かれた理想の人物論の一つとしてここで触れておきたい。

では「読諸葛武侯伝」の内容を見てみよう。小楠は冒頭で「諸葛亮伝」に付けられた斐松の注の中から、劉備に諸葛亮を推薦した司馬徳操（司馬徽）の言葉「儒生・俗士は、何ぞ時務を知らんや、時務を知るは俊傑に在り。」<sup>61)</sup>を引用し、この言葉が儒学を学ぶ者に対する戒めになっていると述べる。学ぶ者が貴しとするのは、知見が明らかで物事の奥底に通じ、天と人の理を明らかにして、物事の変化にうまく対応し、行いが正大光明であることである。ところが、俗儒は章句の末節に拘泥し、道の大本を知らず、人欲の私に溺れ、国の治乱を論ずることができずにいる。このように小楠は日本で儒学を学ぶ者のほとんどが、司馬徳操が斥ける、時務を知らない者ばかりであると断じている。

次に小楠はわが身に立ち返り、日夜講学して修己治人の道に励み、賢人君子を目指していると述べる。その上で「夫れ道は経に存し、此に求めて足る。然りと雖も諸を人に求めざれば、則ち賢を希うの心は其れ或いは実らざるなり」<sup>62)</sup>と、道を知るには經典で十分だが、賢をねがう心を実らせるには賢人君子の伝を読む必要があるという。

このような前置きの後、小楠は夏、殷、周三代の後の人物では、諸葛武侯ほど立派な人物はいない、まさに司馬徳操のいう時務を知る俊傑であると言う。小楠によれば、諸葛武侯は心術が正大光明で、一生耕作に明け暮れる境涯にありながら、一旦劉備に迎えられると龍に変化し鳳凰のように飛翔して、絶えた漢室を再興し、大義を万世に明らかにした。

59) 前掲元田永孚「書見聞私記後」参照。

60) この5点の詩文は福井県立図書館の松平文庫に『機密録』と題する冊子に収められている。

61) 「諸葛亮伝」（陳寿『三国志』第4分冊 蜀書、中華書局、1982年所収）、913頁。

62) 『遺稿篇』、688頁。『漢詩文全釈』、435頁。

諸葛武侯は「聖賢の道に背かざる者」<sup>63)</sup>であり、道を学ぶ者は少しでも諸葛武侯に近づこうと努めるべきであるというのがこの文章の結論である。

このように諸葛武侯は、三代の聖賢の道を受け継いだ人物とみなされている。

以上、毛利斉広、上杉鷹山、諸葛武侯に関する小楠の記述を精読しながら、30代の小楠の三代理念を探究してきた。その結果、この時期の三代の思想が、功利の政治を排していたこと、三代における聖人の道を信じて、己を修め、さらに天下に広げて民を治める修己治人をその内容としていたこと、特に民のための実践を重視していたことが明らかになった。

注意する必要があるのは、小楠は30代において、秦、漢以降の功利の政治ではなく、夏、殷、周三代の政治を目標にすべきだと言いながら、三代の理想的人物に言及することがほとんどないことである。むしろ、中国では三国時代の諸葛武侯、日本では江戸時代の毛利斉広、上杉鷹山が理想の人物として挙げられている。このことから、小楠が30代において三代と言うときには、40代後半以降における堯、舜、禹に関する記述のように明確で具体的な皇帝のイメージがなかったこと、功利の政治ではなく、あくまでも理想の政治を目指すこと、儒学の理想を堅持することを強調するための言葉であったことが分かる。

小楠がこの当時功利の政治に言及するときには、春秋時代の斉の宰相だった管仲の政治を念頭に置いている。『史記』<sup>64)</sup>列伝によれば、管仲は、貨物を流通し、財宝を蓄積し、国を富まし、兵を強くし、民の好き嫌いに応じて政治を行い、小国の斉を天下の覇者に押し上げた。小楠もこのように民の好悪に迎合する富国強兵政策の政治家というイメージで管仲を捉えていたと考えられる。

このような管仲の功利の政に対し、小楠は己を修めた上で民衆の生活を安んずることを第一に考える、三代の王道政治を対置したのである。

### 第3節 『近思録』の影響

前述したように小楠は、天保14年(1843)ごろから実学党の同志と『近思録』の講学を始めた。小楠によって三代の理念が初めて提唱されたのも天保14年である。本節では、小楠の三代の理念の形成にあたって『近思録』が与えた影響を考察したい。

『近思録』を見ると、三代という言葉は6箇所で見られる。そのうち3箇所、今の世の中に三代の世を実現しようという文脈で、つまり理想的な政治が行われた時代と

63) 『遺稿篇』, 688頁。『漢詩文全釈』, 436頁。

64) 司馬遷『史記』第7冊, 中華書局, 1982年, 2131-2134頁。

して使われている<sup>65)</sup>。そのうちの二つは程頤（程易川）の文章の中に、あとの一つは呂與叔の「横渠先生行状」に出てくる。

ここでは『近思録』巻の八「治体」篇における程頤の文章を引用してみよう。「…志を立つとは、至誠もて心を一にし、道を以て自ら任じ、聖人の訓を以て必ず信ず可しと為し、先王の治を必ず行ふ<sup>べ</sup>可しと為し、近規に<sup>ちうたい</sup>狂滞せず、衆口に遷惑されず、必ず天下を三代の世の如くなるに致すを期するなり、と。」このように程頤は立志の説明の最後のところで、天下を三代の世のようにする心がけを説いている。これは小楠の三代理念と変わるところはない。

前述したように、小楠が政治理念を宣言するために三代という言葉を使ったのは、天保14年（1843）の「題見聞私記後」が最初である。また、小楠と一緒に『近思録』を読んだ元田永孚の文章を見ても、天保14年になって初めて三代という言葉を使っている<sup>66)</sup>。『近思録』講学が小楠や元田の三代理念の形成を促した可能性がある。

『近思録』には、三代以外にも「立志」、「為己之学」など、30代の小楠が自らの思想を表現するために使った言葉がよく出てくる。『近思録』には、王道思想や愛民思想、訓故・記誦に専念して実行が伴わないことへの批判、学んで聖人に至る事ができるという思想など、小楠が当時強調していた思想が含まれている。『近思録』は小楠にとって語彙と発想の源泉の一つであったと考えられる<sup>67)</sup>。

『近思録』講学がきっかけになって小楠が『近思録』を精読したことは、弘化2年（1845）に、荻昌国が作成した「近思録説」を批評した文章<sup>68)</sup>において『近思録』の構成について詳論していることから分かる。小楠によれば、『大学』は大きく言えば、聖人の視点に立ち、修己治人という枠組みを使って「三代聖王天下を治め玉ふ学体」を解説した書であり、『近思録』は儒学を学ぶ者の視点に立って、周敦頤、程頤、程頤、張載の4人の語録を集め、

65) 朱熹、呂祖謙編『近思録』（『朱子全書』第13巻、上海古籍出版社、2002年所収、以下全書版『近思録』と略記）、203、242、255頁。市川訳注『近思録』、217-219、413-414、486頁。本文の引用箇所を書き下しは市川に拠る。単に夏、殷、周を指示する三代の用例は、全書版『近思録』、205、250、254頁、市川訳注『近思録』、226、461-462、482-483頁参照。

66) 前掲元田永孚『小楠先生批評 東野詩稿』参照。

67) 「立志」の用例は、全書版『近思録』、242頁、市川訳注『近思録』、412-413頁、「為己之学」の用例は、全書版『近思録』、180、186、227頁、市川訳注『近思録』、82、119、331頁参照。王道思想、愛民思想の箇所は、全書版『近思録』、212、242、247、257、262頁、市川訳注『近思録』、264、416、448、495、523頁、記誦・訓詁の学への批判は、全書版『近思録』、180、181頁、市川訳注『近思録』、83、91頁、学んで聖人に至るという思想は、全書版『近思録』、176頁、市川訳注『近思録』、59頁参照。

68) 『遺稿篇』、773-777頁。

それを基本的には『大学』の修己治人の枠組みで配列したものである。ただ、『近思録』は、儒学徒のための入門書であるから、「修己」の前、全体の冒頭に「人道の大意」を知るための「道体」の章を立て、さらに「治人」に関する章の後に「教学」、「警戒」、「弁異端」、「観聖賢」の章を置いている。このように『近思録』は、儒学を学び始めてから聖賢に至るまでの階梯の全体を網羅していると小楠は考えていた。

三代という言葉は、すでに『論語』において人々の心が真っ直ぐな良い時代とみなされ、『孟子』の場合は、少なくともその勃興期の盛んな時期には仁政が行われた時代、あるいは喪に関する礼が守られた時代として用いられている<sup>69)</sup>。また朱子も『大学章句』の序<sup>70)</sup>において、教育は三代の教育制度を見習うべきだと力説している。従って、小楠が三代理念を提唱する直接の契機になったのは、『近思録』を読んだことであると断定することはできない。しかし、その可能性はあると言えよう。

#### 第4章 30代後半から41歳までの小楠

肥後藩では天保10年以来米価（肥後米の大坂売価格）が下がり<sup>71)</sup>、民衆は困窮した。さらに天保14年（1843）の9月3日には、台風、高潮が熊本を襲い多大な被害が出た。「感懐二首」が詠まれたのはこの年の秋ごろである。このように天保13年から天保14年にかけて民衆の窮状が小楠の視野に明確な形で入り、経書で学んだ王道思想と結びついていった。

小楠は『見聞私記』で記述された毛利斉広の思想や事績に接して、三代の理念を体現する為政者が同時代に生きていたことを実感し、天保14年11月「題見聞私記後」を執筆した。

本章では、小楠が「題見聞私記後」を書いた天保14年（1843）11月以降、越前藩士三寺三作に5点の詩文や書簡を託した嘉永2年（1849）11月にまでの時期の思想を考察の対象とする。30代後半から41歳にかけての時期にあたる。

この時期のもので特に重要なのは、弘化2年（1845）に詠まれた「感懐十首」及び三寺三作に託した5点の詩文や書簡である。後者の原稿は福井県立図書館松平文庫に『機密録』と題して収められている。本章では、第1節と第2節でそれぞれ「感懐十首」と『機密録』を中心に上げ、30代後半から41歳にかけて小楠がどのような思想をもっていたかを明

69) 金谷治訳注『論語』、岩波書店（岩波文庫）、2000年、316頁。前掲小林勝人訳注『孟子（上）』、188、194頁。小林勝人訳注『孟子（下）』、岩波書店（岩波文庫）、1997年、15-16頁。

70) 朱子「大学章句序」（朱熹『四書集註』、芸文印書館、1979年所収）、1葉。金谷治訳注『大学・中庸』、岩波書店（岩波文庫）、1998年、87-89頁。

71) 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編第3巻近世1』、2001年、337頁。

らかにしたい。

## 第1節 「感懐十首」

「感懐十首」は弘化2（1845）年37歳のときに詠まれた漢詩である。野口によれば、一番初稿に近いと考えられるのは水俣市立蘇峰記念館の淇水文庫所蔵の写本である<sup>72)</sup>。この「感懐十首」を読むと、小楠と一緒に講学している友人に対し、「経営心」を排して、静かに味わいながら儒学を学んでいる心境を伝え、到達した朱子学理解を知らせようとしたものであることが分かる。

後述するように、小楠は嘉永2年（1849）8月10日付の書簡「奉問条々」<sup>73)</sup>の中で、功利を排除した自己修養の学（「為己之学」）として朱子学を把握していたが、すでに「感懐十首」でも同じことが別の表現で表されている。

この当時、小楠は肥後の朱子学者である大塚退野<sup>74)</sup>に私淑して朱子学を学んでいた。このことは「感懐十首」（淇水文庫）の第6首中に「我は慕う退翁学，学脈淵源深し。萬殊の理に洞通して，一本此の仁に会す」<sup>75)</sup>という詩句があることから分かる。ここで「退翁」とは、大塚退野のことである。退野の学問は、万物と同じくあらゆる人間に理が具わっているという確信の上に、自己修養のための学問を意味する「為己之学」から出発して「修己治人」の理想を実現するという、朱子に忠実な学風であった。

「萬殊の理に洞通して，一本此の仁に会す」とは、大塚退野の学（朱子学）が様々な理を洞察して、その本が一つであり、究極的には「仁」の概念に帰着すると把握しているという意味である。小楠自身も朱子学の根本に「仁」の概念を見出していた<sup>76)</sup>。

さて、荻昌国は弘化2年（1845）には、「孟子説」<sup>77)</sup>を著して、儒学を修める者は、齊の

72) 前掲野口宗親「横井小楠「感懐」詩について」、223-224頁。

73) 『遺稿篇』、127頁。

74) 小楠が大塚退野から受けた影響については、次の2論文参照。楠本正継「大塚退野並びに其学派の思想——熊本実学思想の研究」同編『九州儒学思想の研究』1957年、拙稿「大塚退野、平野深淵、横井小楠——近世における「実学」の一系譜——」『大阪産業大学論集』人文科学篇107号、2002年。

75) 『漢詩文全釈』、151頁。小楠は嘉永2年（1849）に三寺三作に渡すときに、「退翁学」を「紫陽学」（紫陽は朱子の別号）と直している。『漢詩文全釈』、143-144頁。

76) 横井小楠における仁の概念については次の研究論文がある。前掲平石直昭「主体・天理・天帝（二）——横井小楠の政治思想——」、114-118頁。沼田哲「「仁」と「三代之道」——横井小楠思想の特質についての一考察——」『日本歴史』332号、1976年、48-50頁。八木清治「横井小楠の「仁」」『日本思想史研究』第16号、1984年、13-14頁。前掲源了圓「横井小楠の「三代之学」における基本的概念の検討」、53-54頁。

77) 熊本近世史の会『年報熊本近世史 熊本近世史論集』、1987年、36-38頁。

宰相であった管子や晏子による功利の政治ではなく、孟子が唱える、仁義に基づく「唐虞三代」の王道政治を盛んにしなければならないと述べている（「唐」は堯の姓の陶唐氏に、「虞」は舜の姓の有虞氏に由来する）。

この文章の内容は、小楠が当時唱えていた三代の理念とそっくりである。小楠は、この文章を読んで、「…議論明白一語之増減も致す可きこと無く敬服仕候。」<sup>78)</sup>と誉め、管子や晏子の罪は「天地に通じ悪むべきの極に存じ奉り候。」と賛意を表している。当時荻が小楠と同じ思想的立場に立っていたことが分かる。

## 第2節 41歳時点の思想

前述のように小楠は、嘉永2年(1849)41歳の年、来塾した越前藩士三寺三作が旅立つ際、それまでに書いた詩文や手紙の中から5点を選び、書き直した上で託した。「奉問条々」、「恭題泰勝公和歌巻後」、「題見聞私記後」、「感懐十首」、「読諸葛武侯伝」である。越前藩主の松平春嶽や主だった越前藩士の閲覧に供するためであった。

5点の詩文や書簡は、この時期における小楠の思想のエッセンスと言えるものであり、朱子学に関する見解も表明されている。他藩の藩主や藩士に見せるのであるから自信作でもあっただろう。この内「題見聞私記後」、「感懐十首」、「読諸葛武侯伝」の3点で三代という言葉が使われている。

本節では、小楠自身の配列に従って5点を読みながら、その基本的内容の相互関係を考察し、41歳の時点で小楠の三代思想がどのようなものであったかを概括したい。

まず、「奉問条々」は、小楠が久留米藩儒の本庄一郎に宛てて書いた書簡である（嘉永2年(1849)8月10日付）。これは、小楠がそれまでの朱子学研究を総括したものとも言え、中国と日本の代表的朱子学者を取り上げて、学問に対する動機が他者の評価のためか（「為人之学」）、自己修養のためか（「為己之学」）を厳しく問うた上で、本庄に自分の批評の妥当性を質したものである。

この書簡のキーワードは「為己之学」という言葉である。この言葉の出典は、『論語』憲問篇の「古えの学者は己れの為めにし、今の学者は人の為めにす。」<sup>79)</sup>であり、昔学んだ人は、自分の修養のためにし、今の学ぶ人は自分が人に知られたいからしているという意味である。従って、「為己之学」は名声などの功利を排した自己修養のための学問を意味する<sup>80)</sup>。

78) 『遺稿篇』, 777頁。

79) 前掲金谷治訳注『論語』, 287頁。

80) 朱子も大塚退野も「為己之学」を重んじている。朱熹『論語集註』（前掲『四書集註』所収）,

次に、「恭題泰勝公和歌巻後」<sup>81)</sup>は、長岡監物家の祖先が細川藤孝（泰勝公、号は幽斎、細川家初代）から賜ったという、「身の為に君を思ふは口惜しや、君の為にと身をは思はて」という和歌に添えた文章（原漢文）である。細川幽斎がいかに主君の足利氏に対して忠義を尽くしたかをたたえ、たとえ無実の罪を着せられても主君を怨まない忠誠心を称揚したものである。

「題見聞私記後」は、日常生活の中で己を修め、三代の理念に従って人を治めようとした君主として、毛利斉広、上杉鷹山を顕彰し、秦、漢の功利の政治ではなく、夏、殷、周三代の仁政を目指す政治理念を提唱した文章である。

「感懐十首」は、野口宗親によれば、嘉永2年（1849）に三寺三作に渡されるときに、一首が削除されて、三代理念を掲げた一首が入れられ、さらに詩句の修正が行われている。

新たに挿入された漢詩の中に「治教は三代を期し、漢唐の林に列せず」<sup>82)</sup>という一節がある。秦漢の代わりに漢唐となっているが、「三代」という言葉が使われ、「題見聞私記後」と同じ理念がここでも唱えられている。

嘉永2年（1849）に書き直された「感懐十首」は、功利を排して専一に朱子学を学ぶ心境と自らの朱子学理解を詠んだ旧稿に、新たに三代の理念を付け加えた作品である。

最後の「読諸葛武侯伝」は、夏、殷、周三代以降では、諸葛武侯が、その当時何をしなければならぬかを知っていた俊傑であり、儒学を学ぶ者が模範としなければならぬと述べた文章である。

『機密録』全体の構成を考えてみよう。「奉問条々」と「感懐十首」は、「為己之学」すなわち自己修養の学としての朱子学理解を示している。「恭題泰勝公和歌巻後」は臣下の忠誠心に関する理想を表明している。「題見聞私記後」と「感懐十首」は、「修己治人」の根本理念である三代の理念を提唱するものであった。「読諸葛武侯伝」は三代以降の人物としては、諸葛武侯こそ儒学徒が模範とすべき俊傑であると主張した文章である。

以上のように『機密録』は「修己治人」の理想像として、私智を排した自己修養、王道政治を基本とする三代理念を提唱し、厚い忠誠心を重んじ、模範とすべき人物像を提示したものである。『機密録』は30代の小楠の思想の総決算といえよう。

---

七の17葉。大塚退野『孚斎存稿』卷之三（『肥後文献叢書』第4巻、隆文館、1920年所収）、655頁。

81) 『遺稿篇』、693-694頁。『漢詩文全釈』、450-453頁。

82) 『漢詩文全釈』、451頁。

## 結論

横井小楠が30代半ばに形成した三代の理念は、自己修養、王道政治をその内容とし、仁によって基礎づけられていた。小楠の三代理念は、功利の政治ではだめだということを強調するための概念である。功利の政治は民のためではなく国家の富国強兵のための政治を意味する。

功利の否定は、「時務策」で展開された、肥後藩の貨殖の政に対する小楠の激しい批判とも呼応している。小楠にとって貨殖の政は、まさに藩の財政を救うための応急措置であり、廃止されるべき功利の政策であった。

小楠は三代の理念を強調しながら、三代の聖人にはほとんど言及しなかった。むしろ日本の毛利斉広や上杉鷹山を三代の政治を目指した大名として称賛し、中国では、三代以後の人物である諸葛武侯を、儒学を学ぶ者が目標とすべき俊傑であると述べている。

しかし、三代以前の神話的皇帝である堯、舜や夏の始祖である禹は、30代の詩文にはほとんど登場しない<sup>83)</sup>。堯舜三代の聖賢は30代の小楠にはまだ身近なものにはなっていなかった。天に代わって民衆の生活の向上に尽くした皇帝として、堯、舜、禹のイメージが明確になっていくのは、小楠が40代後半になって、世界地理書『海国図志』を読んで西洋の政治制度や経済政策を知ってからである。

小楠は30代には、毛利斉広、上杉鷹山、諸葛武侯を取り上げ、称賛した。思想の実践を重んじる小楠は、「大丈夫 心に聖賢を希う<sup>こいねが</sup>」<sup>84)</sup>として、模範的人物をイメージしてそれに近づく努力を自らに課し、同学の士にも勧めたのである。

自己修養に立って王道政治を目指す三代の理念は、朱子学思想としては極めてオーソドックスなものである。しかし、基本的には幕府や藩によって将軍家や大名家の利害のための政治が行われていた江戸時代に、為政者の自己修養、王道政治を内容とする三代理念の実現を本気で目指すことは、革新的なことであった。小楠が保守的な肥後藩に受け入れられなかったのは当然である。小楠と当初は志を同じくした、肥後藩家老の長岡監物や越前藩主の松平春嶽でさえも結局小楠についていけなかった。

小楠が三代の理念を形成する際に影響を受けた可能性がある書籍としては、特に『集義和書』、『孟子』、『近思録』が挙げられる。このうち『集義和書』と『孟子』の王道思想が三代理念の素地を形作り、天保14年(1843)における『近思録』の講学が直接のきっかけになって、小楠の三代理念が成立したと考えられる。

83) 弘化2年(1845)の「聖学問答」の中に舜の用例がある。『遺稿篇』, 944-945頁。

84) 『遺稿篇』, 874頁。『漢詩文全釈』, 130頁。

小楠が30代半ばに三代理念を形成した背景には、天保10年（1839）以降の米価下落や天保14年の台風災害による民衆の窮乏が小楠の視界に入ってきたことがある。民衆の困窮を見て小楠の心に民衆に対する同情心が自然に生まれ、それが儒教の三代理念と合致した。このようにして小楠は心の深いところで三代の理念を「合点」<sup>85)</sup>したのである。

---

85) 小楠は、儒学を学ぶ者が本心に生じる感発に気づき、儒学の教えを「なるほどこのことと心に真実に合点」することを重んじていた。「聖学問答」（『遺稿篇』所収）、944-945頁。